

東京 IPO 特別コラム

2017年11月7日 Vol.102

上げ相場の蚊帳の外にある銘柄にも投資チャンス

日経平均はついに2万3000円台乗せまであと一步のところまで接近。機関投資家を中心にした相場展開では日経225採用銘柄への関心が高いため資金の流れが偏ってしまいがちになりますので、こうした潮流に乗るか乗らないかの選択肢に投資家の多くは悩みを抱えてしまうことになります。ただ、相場には行き過ぎがつきもの。2万円台乗せから2万3000円まで15%の上昇が1か月余りの期間で実現するのはバブル相場以来なのではないかと思われませんが、これぞ株式相場の不思議なところ。目前に迫りつつある有事を前に株高を演出しておけば、その後の波乱相場も乗り切れるに違いないととにかく行くところまで行こうという割り切り方なのかも知れません。

こうした上げ相場に乗れる銘柄もあれば、下げトレンドのまま株価の下落を続ける銘柄もあって需給の好悪が鮮明になっている相場でもあります。株価の動きが悪い株を売って動きの良い銘柄につこうとするのでますます二極化が進展する訳ですが、こうした展開は短期にはなかなか解消されないので冷静な対応が求められます。

本日、9月中間決算の説明会を開催したLIXILピバ(3564・東証1部)もそうした下落基調を続ける代表的な銘柄の一つです。LIXILグループの1社でホームセンターを展開する同社は本年4月17日にIPO(公開価格2050円)して初値は1947円と公開価格を大きく下回ってしまいました。5月に公開価格を上回った時期もありましたが、その後は株価が下落基調を辿り、中間決算で期初計画を下回ったこともあって11月2日に1770円という安値をつけてしまいました。こうしたトレンドがいつまで続くのかを読み取るカギは株価に圧倒的な割安感が感じられるかどうかになります。集まった大勢のアナリストに対して同社が行った懇切丁寧な決算説明からは見直しの余地があるとの印象が持てました。下期業績への回復期待と通期達成への自信の表明。成長戦略の具体化プランの提示などを通じてこれ以上大きく株価が売り込まれることはないだろうと感じた次第です。株価の評価は中間期決算の下方修正を受けて今期通期の決算の下方修正があるのではとの多くのアナリストが感じたのではないかという点を反映したもの。一方で筆者のような中長期視点での評価をする立場ではPER11倍、配当利回り2.3%で株主優待制度(100株以上の3月末株主に10%の割引券5枚を贈呈)活用によってメリットを受ける個人投資家にとっては格好の投資対象となり得るとのポジティブな印象を持った次第です。

こうした全体相場に比べ蚊帳の外に置かれてきた銘柄への見直しがどのように進むかはわかりませんが、発行体企業としても自社のIRに努めメディアなどで取り上げられて、個人投資家にも認知されるならば株価は見直される時期がやってくると考えられます。IR活動を通じて中長期スタンスの投資家のリスクマネーを呼び込めれば頭重い展開が続く銘柄にも投資チャンスが生まれ株価の動きは好転すると期待されます。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)